

第二節 古代・中世



図199 遺跡の位置
5万分之一地形図「新潟」

小丸山遺跡 江南区直り山
こまるやま

亀田砂丘の南端に近い小砂丘に立地する、平安時代の集落跡である。標高約一・五メートルで、三方に広がる水田面より約一メートル高い。昭和六十（一九八五）年、住宅団地造成計画に伴う事前調査で発見され、翌年、新潟市教育委員会が約五二〇〇平方メートルを発掘調査した。発掘地は、住宅団地になっている。

遺跡が厚い土層で覆われていたため、良好な状態で集落跡が残っていた。集落の存続期間は出土した大量の土器から、九世紀半ばから十世紀半ばまでの一〇〇年程度と判断された。遺構は、掘立柱の建物跡一四棟、井戸九基、ごみ穴五基、区画溝一条、畝状小溝などが発見された。

これらの遺構は北東側と南西側の二か所に分かれていた（図二〇〇）。それぞれ、中心に大きな建物があり、その近くに小さな建物、さらにその周辺には畑の跡である小溝があった。

遺構の配置から見て、発掘されたのは二つの屋敷地であったと考えられる。二つとも建物跡の重なりが認められることから、同時に建っていたのは大形建物一棟と、小形建物一〜二棟であろう。大形建物の主人が屋敷を構える農民で、屋敷内の小形建物に配下の農民がいたと思わ

第3章 平野の遺跡

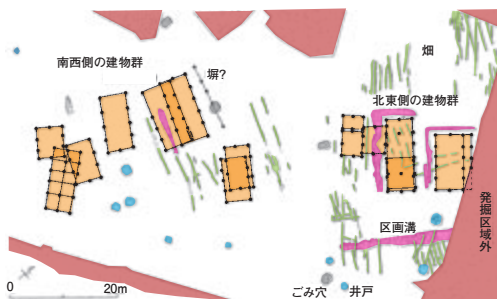


図200 遺構配置図



図201 東側の大形建物跡



図202 「西家」と書かれた須恵器坏

ある。再び大きな社会の変化が訪れたのである。

れる。また、北東側の大形建物二棟は、二方に雨落ち溝があり、面積約六五平方メートルで、平行移動のように建て替えられている。南西側に比べ、大形で立派な建物であることから、村の有力者の建物であった可能性がある。

小丸山遺跡ができた九世紀半ばは、越後平野で集落が急増する時期である。その一方で、このころに堅穴^{たてあな}住居が密集する大きな集落が衰え、姿を消す。この時期にできた集落の多くは、

国郡制による支配体制の衰退で、新たに生まれた有力農民層によって開発された可能性がある。小丸山遺跡では、三方に広がる低地に水田が開かれていたのであろう。

十世紀初め、小丸山遺跡は無人となる。この時期は、越後平野の集落が激減する時期で